

# 所沢市における小学校教員の図画工作科指導意識 — 図画工作・美術の所沢学力保障カリキュラム作成のためのアンケートから —

三澤一実\*・増田 毅\*\*・麻生敬子\*\*\*・田中俊一\*\*\*\*・宮島瑞子\*\*\*\*\*

## Elementary School Drawing Instruction at Tokorozawa City — An Analysis of Questionnaire Results —

Kazumi MISAWA Tuyoshi MASUDA Keiko ASO  
Syunichi TANAKA Mizuko MIYAZIMA

要旨：小学校では東京都など一部の地域を除き図画工作は学級担任が指導をしている。そのような中、図画工作の指導や評価について悩みを持っている小学校教員も多い。所沢市の全小学校教員に対して行ったアンケートでは、指導に自信があると答えた教員はわずか20%である。また、造形あそびについては、49%の教員が取り組んでいると答えた。この数値に対し保護者のアンケートでは98%が図画工作科の必要性を認め期待し、表現する楽しさを味わわせてほしい。(71%)と強く望んでいる。アンケートを分析していくと、図画工作科の教科の特徴を十分に理解し、その特性を生かし切れていない教員や、そのような現状を改善するような方策がないままにある小学校の実態が見えてくる。まず教員の実態を捉え、教育現場に起きている問題を考えていくことが図画工作の学力を保障することに繋がっていくと考える。

キーワード：学力 カリキュラム 図画工作・美術 指導 評価 保護者意識 教員アンケート

### はじめに

平成17年度から所沢教育センター研究員<sup>1)</sup>と共同研究で「所沢市における図画工作・美術科の学力保障カリキュラムの開発」に取り組んでいる。図画工作の指導は各学校によって指導の一貫性がなく、中学校入学時に獲得している技能や能力において学校格差があり、また中学校でもカリキュラムの違いによって生徒が学習している内容に開きがある。このことは基礎的基本的な学力を保障する義務教育において決して好ましいことではない。ま

た、なぜそのような学習内容の開きが起きているかを探ることは、所沢市における学力の保障を考えることであり、ひいては日本の図画工作科指導の改善につながるのではないかと考えている。

日本の義務教育では、図画工作・美術科の学習はその教科の特性を生かすため題材による学習内容の習得という方法をとっている。この題材による教材提示は子どもたちの問題解決的な活動を通して学習内容を身につける特徴があり、何より教員の指導力が問われる<sup>2)</sup>。そのような指導上の特性は、美術を専門的に学んでこなかった多くの小学校教諭にとって迷いや不理解を生んでいると考えられる。そこで共同研究では義務教育9年間を通して身につける学力を明確にしたうえで、小中の連関を考えたカリキュラムの策定に取り組もうというものである。

\*みさわ かずみ 文教大学教育学部学校教育課程

\*\*ますだ つよし 所沢市立東所沢小学校教諭

\*\*\*あそう けいこ 所沢市立狭山ヶ丘中学校教諭

\*\*\*\*たなか しゅんいち 所沢市立柳瀬中学校教諭

\*\*\*\*\*みやじま みずこ 所沢市立向陽中学校教諭

図画工作科は知識の習得に重きを置く他の教科に比べ、人間形成に積極的に関与し、情操や感性、想像力や美意識など個人の情緒的、

表-1 小学校教師 図画工作科指導に関するアンケート (サンプル数421件) 平成17年度

あなたは本年度図画工作を教えていますか。		
A. 教えている	74.60 %	314人
B. 教えていない	25.20 %	106人
C. 無回答・その他	0.20 %	1人
図画工作を担当する教員は、学級担任がよいが、それとも専任の教員がよいと思いますか。(理由を記述)		
A. 学級担任	23.00 %	97人
B. 専任の教員	56.50 %	238人
C. 無回答・その他	20.40 %	86人
日頃の図画工作の指導で、子どもたちにどのような力をつけたいと考えていますか。(記述式)		
教科書の題材をもとに、子どもや地域の実態に合わせ、題材を工夫改善して取り組んでいますか。		
A. 工夫、改善している	39.20 %	165人
B. ほぼ教科書通りに進めさほど変更しない。	49.20 %	207人
C. 無回答・その他	11.60 %	49人
教科書以外の題材に取り組んでいますか。また取り組もうと思っ ていますか。(理由を記述)		
A. いない	36.60 %	154人
B. いる	51.80 %	218人
C. 無回答・その他	11.60 %	49人
造形あそびに取り組んでいますか。(理由を記述)		
A. いる	49.40 %	208人
B. いない	38.50 %	162人
C. 無回答・その他	12.10 %	51人
身の回りに図画工作の指導について専門的なアドバイスをもらえる教員がいますか。		
A. いる	35.90 %	151人
B. いない	54.60 %	230人
C. 無回答・その他	9.50 %	40人
図画工作の指導についてお聞かせください。		
A. 自信を持って指導している	20.00 %	84人
B. 他の教科と比べてどちらかというと自信がない	66.30 %	279人
C. 無回答・その他	13.80 %	58人
図画工作の評価についてお聞かせください。		
A. 自信を持って評価している	18.80 %	79人
B. 他の教科と比べてどちらかというと自信がない	67.20 %	283人
C. 無回答・その他	14.00 %	59人
担当学年を教えてください。		
あなたの年齢をおしえてください。		

形式的な能力を育てる側面が大きい。このことは教科の目標に「情操を育てる」<sup>3)</sup>という文言が入っていることから理解できる。つまり図工・美術は個人の感じ方や考え方に依拠した表現及び鑑賞の活動に取り組む中で、人類に共通の価値を見いだしていこうとする学習とも言える。しかし共通の価値といえどもそれは明快な答えを持つものではなく、個人の中に形成されていく価値である。故に、一つの答えに収束できない指導の難しさは常に現場の教員が抱えている課題である。例えば、「子どもの描いた絵をどのように評価してよいか分からない」というような声もその一例であろう。その様な現状から、まずは小学校の教員が抱えている指導上の問題点を明らかにする必要があると考えた。

さて所沢市であるが埼玉県西部に位置し、東京のベットタウンとして発展してきた人口約34万人、学校数48校(小学校33校中学校15校。平成17年現在)の自治体である。所沢市は埼玉県内でも図工・美術が盛んな土地である<sup>4)</sup>。本論では、所沢市の小学校教員の図画工作科指導のアンケートの分析を元に、今日の小学校教員の抱えている図画工作科指導について指導上の問題点を明らかにし、その改善の方向性を示していきたい。

## ・アンケート結果から見る教員の実態

### 1. アンケートの内容と研究の方向性

本研究は小学校教員の指導実態を調査するために質問紙法によるアンケートを実施した。アンケートは管理職、養護教諭を除く市内全教員754名を対象に依頼し、421名の回答を得た。(回収率56%)質問項目と回答は左表の通りである。この回答を元にi学級担任と専科について、ii育てたい力 iii授業及び指導について iv造形あそびへの理解 v保護者の期待、の5観点から現状分析と考察をおこなう。そして所沢の図画工における学力を保

障する手だての一方策を提案する。

(三澤一実)

## 2. アンケート分析 - 教員の姿

### i. 学級担任と専科制について

アンケートの分析から

設問 「図画工作科を担当する教員は、学級担任がよいか、それとも専任の教員がよいと思いませんか。」について、A, 学級担任97人、B, 専任教員238人、C, その他86人であった。回答の内容は、専任教員が指導する良さを専門性の観点から、そして学級担任が指導する良さを児童理解の観点から捉えている点が特徴的である。その他では、双方の長所を生かす提案が大半であった。以下A, B, Cについて詳しく見ていきたい。

#### A. 「専任教員がよい」と答えた理由

良い指導を行うためには、図画工作科に関する専門的な知識や技法技術が必要だから。(159人)

- ・児童の能力を十分に引き出す指導
- ・発達段階に応じた指導
- ・大切なポイントを押さえた指導
- ・教材教具に対する豊かな知識
- ・教員自身の技能や感性の高さ
- ・系統的な指導
- ・指導や評価に自信がない等を含む。

専任の教員ならば、教材研究や授業の準備に十分な時間が確保でき、効率の良い授業も期待できるから。(56人)

- ・学級担任では多題材・広範囲な活動内容を全て指導できない。
- ・指導や評価に自信がない。等を含む。

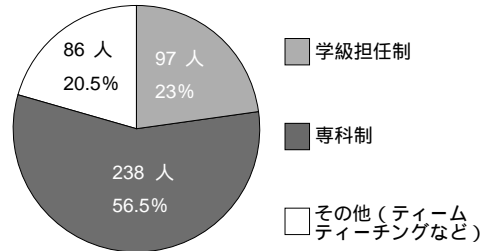
#### B. 「学級担任がよい」と答えた理由

児童理解・作品の理解の点において学級担任が指導するのがよい。(39人)

学級や児童の実態に合わせて、指導の内容や時間の弾力的な運用や個別指導が行える。

- ・現行の指導時間数では、授業時間の弾力的な運用が必要である。

図画工作科を担当する教員は、学級担任がよいか、それとも専科の教員がよいと思いませんか。



グラフ-1 教科指導は専科制か学級担任か

#### C. 「その他」

低学年では学級担任が指導し、高学年で専任の教員が指導する。(33人)

専任教員と学級担任とのチームティーチング。(10人)

どちらが良いとは言えない。(10人)

#### 学級担任と専任教員についての考察

実際には学級担任が指導していながら「専任の教員とどちらがよいか」と尋ねられると、56.5%の教員が専任教員による授業を望んでいることに注目したい。その他の回答の中から「専任の教員とのチームティーチングの授業」を加えると70%を超える数となる。それに対し、「学級担任がよい」と答えたのは23%であった。その理由のほとんどは、「図画工作科を自分(学級担任)で指導することが児童理解に大変有効である」と答えている。「低学年では学級担任がよい」と「チームティーチング」を合わせると33%となる。「専任の教員がよい」と答えた中でも「学級担任のよさ」に児童理解をあげているものも少なくないことや、「どちらが良いとは言えない」などの意見を加えると、約4割と受け取ることが出来る。

ところが、アンケートに出てきた結果は、学級担任で図画工作科の指導や評価に自信を持っている教員は少なかった。児童理解においては専任の教員よりも多くの時間を接し日

常の姿を知っている点、また、児童が図画工作で見せる姿を知ること、児童の姿をより多面的に捉えられ日々の指導に生かせる点など、学級担任のよさを感じつつも、授業の内容と質において専任の教員による指導を望んでいる。専任の教員の専門性、専科制による授業の準備や効率の良さ、系統的な指導を高く評価する実態がある。学力保障の観点から見れば、「専任の教員による指導」がよいと言う結果である。しかし、このことは、専任教員をおけば解決できる問題であろうか。図画工作科の目標は「表現する喜び」を味わわせることにある。児童の内面的な表現欲求を満たす上でも、児童に日常的に接している学級担任の方が良いのではないだろうか。

「専任教員がよい」理由の「専門性」については、「専門的な知識や技法・技術指導」をあげる教員が一番多かった。裏返せば、学級担任は指導に不安を持っている。それを取り除くことが出来れば、学級担任のよさを生かし児童理解を深められる教科として、図画工作で育てる学力の充実とともに子どもとの関係の中で重要な役割を持った教科として位置づけられてくる。

(増田毅)

## ii. 育てたい力

育てたい力のアンケートから

設問 「日頃の図画工作の指導で、子どもたちにどのような力をつけたいと考えていますか」は回答が記述であるため、学習指導要領の内容をもとに、分析項目を8項目設定し集計を行った。(表-2)

初めに「感性・感受性」については、全体の1割弱の回答数が得られ「豊かな感性」と書かれたものが圧倒的に多く「色彩感覚」や「鑑賞力」と具体的な内容で書かれたものもあった。

すべての回答の中で「表現力」をあげたものが最も多い。その中には、「自分の思いを表

表-2 教師が考える図画工作で育てたい力

	項目	人数
見る力 (55人14.8%)	感性・感受性	27人(7%)
	観察力	18人(5%)
	想像力	10人(3%)
表す力 (257人71.8%)	表現力	135人(35%)
	技術・技能	67人(17%)
	創造力(発想力)	55人(14%)
態度 (73人20.4%)	姿勢(集中力, 積極性他)	37人(10%)
	楽しむ	36人(9%)

現させたい」「自分の表現方法を見つけさげたい」「素直に表現させたい、自由にのびのび表現させたい」の記述が多々見られた。これらを見ても、教員が児童の表現力を育てたいと純粋に願っていることがうかがえる。また表現力の中には「描写力」という回答も1割以上を占め、中学校を意識した力を育てたいという考えがあることも見逃せない。

「技術・技能」についても様々な回答が得られた。記述の中では「基礎的な技術、技能」という言葉を使い回答してるものもあれば、より具体的に書かれているものもあった。「絵具の使い方」「色の作り方、ぬり方」「図画工作で使用される用具全般の使い方」である。つまり、より自分らしい表現をするためには、基礎的技術、技能の習得の裏付けがあってこそ可能であると感じているということだろう。このことは前述の専任の教員への期待と一致してくる。

設問の解答で特徴的と思われるのが、授業態度に関する内容をあげている点だ。具体的な回答として「集中して作業をする力、作品を完成させる力」「積極性」「表現や創作活動を楽しめる」さらに「整理整頓できる力」である。これらからは、図画工作の授業そのものを集中させたい、あるいは作品に根気強く取り組ませたいという教員の思いが感じられる。規律ある態度などの教育課題が、表現や技術指導と同様に重要視されている小学校の現状が垣間見られる。

育てたい力についての考察

記述の内容を、さらに「見る力」「表す力」「態度」の3つに分類しまとめてみる。多くの教員が「見る力」よりも、「表す力」「態度」を育てたいと考えている。(グラフ-2)これは今回のアンケート結果の大きな特徴と言える。

「態度」に関しては、整理整頓も含め、集中して授業に取り組みさせたい、作品を完成させたい。しかしそれ故に作業中の注意が増え、結果的に子どもたちが創作活動を楽しんで行えていないのではないかとという疑問も生じてくる。つまり、学級担任が担当しているということで、生徒指導の側面が強調され、一方で児童が心から解放され表現し活動を存分に広げていく自由な授業のあり方に、規律が守られなくなる不安も生じてしまうのではないか。

見る力に関しては全体で14%である。作品を作り出すには基礎的技術に裏付けされた表現力なくしては完成に至ることは有りえない。とか、教員側の教えなければならない。また、作品を完成させなければならないという考え方がどうしても先行してしまう。これらが「見る力」を育てたいという考えに至らない実態であろう。しかし見る行いのないところで物を作り、描くことは出来ない。「見る力」をつけることが、「表す力」を育てることの大前提であると言っても過言ではない。これらを踏まえると、まず「見る力」を育てることの

重要性を理解してもらい、その上で回答内容に即した資質向上を図る研修が必要であると考えられよう。

(麻生敬子)

iii. 授業及び指導について

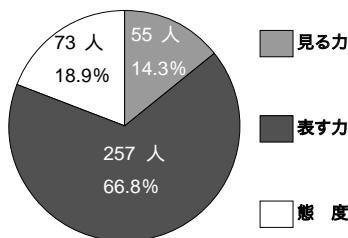
アンケート分析

設問の「身の回りに図画工作について専門的なアドバイスをもらえる教員がいますか」について、「専門的なアドバイスがもらえる教員がいる」が全体の35.9%であり、「いない」は、54.6%である。このアドバイスの有無が題材の工夫及び指導・評価の項目とどのように関連しているか見てみたい。

設問の「教科書の題材をもとに、子どもや地域の実態に合わせ、題材を工夫改善して取り組んでいますか」について、題材を工夫して取り組んでいる率は、アドバイスをもらえる教員はもらえない環境にある教員より20%高い(表3アイ)。そして、ほぼ教科書通りに進めている率は、アドバイスをもらえない教員の方がもらえる教員より23%高い(表3ウエ)。このことからアドバイスをもらえないから教科書通りに授業を進めていく実態が読み取れる。

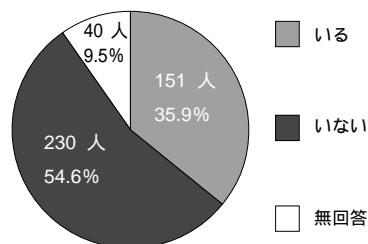
次に、アドバイスをもらえる環境を年代別でみたとき、30代から50代までは、「アドバイスがもらえる教員がいない」の率が49.3%~59.4%と高くなっていくが、20代は57.6%と、40代とほぼ同じ割合を示している。(表-5)

日頃の指導で子どもたちにどのような力をつけたいと考えていますか(記述式)



グラフ-2 つけたい力の割合

身の回りに図画工作の指導について専門的なアドバイスをもらえる教員がいますか



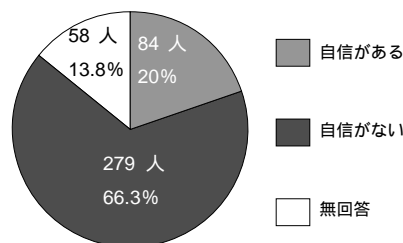
グラフ-3 アドバイスをもらえる教員の存在

表-3 アドバイスの有無と題材の工夫

	アドバイスがもらえる教員がいる	アドバイスがもらえない教員がいない
題材を工夫して取り組んでいる (165人, 39.2%)	79人(52.3%)ア	74人(32.2%)イ
ほぼ教科書通り (207人, 49.2%)	60人(39.7%)ウ	144人(62.6%)エ

表1設問の「図画工作の指導についてお聞かせください」では、「自信を持って指導している」が20.0%であるのに対し、「他の教科と比べると自信がない」は66.3%である。これを表1設問の「図画工作を担当する教員は、学級担任がよいか、それとも専任の教員がよいと思いますか」との関連で見るとどちらも半数を超えている(表-4(e)(f))。しかし、表1設問「教科書の題材をもとに、子どもや地域の実態に合わせ、題材を工夫改善して取り組んでいますか」という視点で見ると、自信を持って指導している教員のうち、題材を工夫して取り組んでいる割合が64.3%であるのに対し、自信がない教員では、題材を工

図画工作科の指導についてお聞かせください



グラフ-4 図画工作科の指導について

夫して取り組んでいる割合が34.4%である(表-4(i)(j))。

年代別に見ると、年代が上がるにつれ、「自信を持って指導している」教員の割合が13.6%~26.1%とわずかではあるが増えている。

設問の「図画工作の評価についてお聞かせください」についても、設問の「指導」に関する結果とほぼ同様の傾向が見られるが、ここで特筆すべき点は、評価に自信がある教員は題材工夫率が高いという点である(表4(k))。また、年代別では、30代の11.9%

表-4 教科指導に関する意識と専科制、題材の工夫との関連

	指導について		評価について	
	他の教科と比べ自信がある84人(20.0%)	他の教科と比べ自信がない279人(66.3%)	他の教科と比べ自信がある79人(18.8%)	他の教科と比べ自信がない283人(67.2%)
図画工作を教える教員は学級担任がよい(23%)	34人(40.5%)	55人(19.7%)	29人(36.7%)	58人(20.5%)
図画工作を教える教員は専任がよい(56.5%)	49人(58.3%)	178人(63.8%)	31人(39.2%)	174人(61.5%)
題材を工夫して取り組んでいる(39.2%)	54人(64.3%)	96人(34.4%)	53人(67.1%)	94人(33.2%)
ほぼ教科書通り(49.2%)	23人(27.4%)	175人(62.7%)	23人(29.1%)	177人(62.5%)

表-5 世代別に見た回答の割合

	アドバイスがもらえる教員がいる	アドバイスがもらえない教員がいない	自信を持って指導している	他の教科と比べると自信がない	自信を持って評価している	他の教科と比べると自信がない
20代(59人)	25人(42.4%)	34人(57.6%)	8人(13.6%)	42人(71.2%)	11人(18.6%)	40人(67.8%)
30代(67人)	30人(44.8%)	33人(49.3%)	10人(14.9%)	49人(73.1%)	8人(11.9%)	54人(80.6%)
40代(115人)	42人(36.5%)	66人(57.4%)	21人(18.3%)	83人(72.2%)	23人(20.0%)	79人(68.7%)
50代(165人)	52人(31.5%)	98人(59.4%)	43人(26.1%)	101人(61.2%)	35人(21.2%)	107人(64.8%)

を除き、どの年代も「自信を持って評価している」教員の割合が20%前後を示している。

#### 授業及び指導についての考察

今回調査した小学校教員の実態からは、図画工作の指導に関して自分の指導に自信がもてないという意識が読み取れる。よって教科書通りの題材で指導をしている教員が多いと考えられる。年代別の結果からは、経験を積み重ねることによって少しずつではあるが自信が持てるようになるが、それでも50代で61.2%の自信がないという教員が存在している。また、「図画工作の指導についてお聞かせください」では、自信がないので教科書通りに進めることが多いという傾向が現れた。表3の結果を合わせて考察すると、アドバイスをもらえる教員がいる場合は題材の工夫をする割合が高い。また、表4の題材の工夫をしている教員は自信を持っている率が高いという結果から、題材の工夫を話題として、教員間でディスカッションをしていくことにより、教員の指導に対する自信（積極性）が獲得されていくのではないかと考えられる。

年代別に見たアドバイスをもらえる環境に関しては、一般的に経験年数が上がるに従い教わる立場から教える立場に変化するとともに、また、経験を重ねるごとに確立する自分の指導スタイルを変えられない傾向も現れる。しかし、そのような中で、アドバイスをもらえる環境にいない20代の57.6%という数字についてはどのように捉えたらよいのであろうか。教員集団の年齢構成の偏りや校内研修体制にも関係し、また、同時に職員室文化<sup>5)</sup>の衰退も考えられる。

表1設問の「図画工作の評価についてお聞かせください」に関しては、「図画工作の指導」とほぼ同様の傾向が見受けられた。年代別の結果においては、どの年代においても「自信を持って評価している」割合が20%前後と低い。中でも30代の率が11.9%と特に低

いのは、ちょうど年齢的に子育ての時期と重なり忙しいとともに、一方では、経験も積み、指導力も向上する世代だからこそ生じてくる悩みなのではないだろうか。

図画工作の指導及び評価は評価規準に基づいた評価が教員個人の判断に関わる部分が多い。つまり、教員自身の、子どもの姿や作品を洞察する力に大きく左右されると言えよう。言い換えると他の教科のように複数の教員が共通してテストや解答によって、分かる分からない、及び、できたできないを客観的に判断することのできない図画工作科の特性がある。評価が教員個人の見る力に委ねられ、それは題材における目標設定の不明確さがそのまま評価の曖昧さに結びつくのである。この問題の解決には教員が自ら課題を持って学ぼうとする時期において何らかの支援体制を考えていかなければならないと思える。

(田中俊一)

#### iv. 造形あそびへの理解・分析と考察

造形あそびの充実義務教育9ヶ年において、図工・美術で身につける学力を考えると重要な役割を果たす。なぜならば、造形あそびのように、造形的な表現行為や素材への操作をその場その場で判断し、常に新しい表現を追求し作品を作り変えていく力は、造形表現を支える基本的な資質や能力である。小学校における造形あそびの充実中学校の美術を学ぶ上で基礎的な学力として蓄積され、特に、中学校美術の時間数が少ない中で充実した学習をするために重要となる。

#### アンケートの分析

「造形あそびに取り組んでいますか」という設問をアンケートに設置した理由は、現行の学習指導要領で高学年まで導入された造形あそびがどの程度実施されているかを把握するためである。また、造形あそびに対する考え方を知らるために取り組みに対する理由も書

いてもらった。この理由の分析から教員の造形あそびに対する理解度や意識を読み取ることができる。

アンケート集計から造形あそびへの取り組み状況は、取り組んでいる49%、取り組んでいない38%、無回答13%であった。(表1) 現行の学習指導要領では高学年まで造形あそびが導入され、「つくりたいものをつくる」活動と共に図画工作科の一つの柱になっている。しかしながら現状では約半数しか行われていない。次に、造形あそびの実施状況と他の質問項目との相関を見てみる。

造形あそびをしている人の中で、身の回りにアドバイスをもらえる教員がいるかいないかで見た場合、身の回りにアドバイスをもらえる教員がいない割合が高い。(表-6イ。アドバイスをする立場であることが予想できる) また、造形あそびをしていない教員では、身の回りにアドバイスをもらえる教員がいない割合が多い。(表-6エ) 造形あそびの取り組みと教科書との関連では、教科書の題材を自ら工夫して取り組む教員は、造形あそびに対する意識もやや高いと言える。(表7) また、表7からは、教科書通りに進めていると答えた教員の半数が「造形あそびをしていない」と答えている。次に、指導に対する自信と造形あそびについての相関では、指導に自信がある教員の中での造形あそび実施率は、自信がない教員と比較して若干取り組み率が高いものの顕著な差とはなっていない。(表8-) しかし、造形あそびを行っている教員の中での自信の割合を見てみると指導に自信がない教員の造形あそび実施率が7割と高い。(表8-2カ) また、造形あそびに取り組まない教員の、指導に自信がない割合も8割を超えている。(表8-2ク)

担当学年と実施率においては低学年では実施率が高く、高学年になるにしたがい、実施率が低くなる。(表9-) 年代別では各年代ともそれほど差が生じていない。

さらにアンケートに記述された内容を見てみる。まず、造形あそびに取り組んでいない理由であるが次の3点に集約できる。

ア. 時間的な余裕や活動のための場所が無い等、物理的な条件を理由とするもの。(56件

表-6 造形あそびについて

	身の回りにアドバイスを受ける教員がいる	身の回りにアドバイスを受ける教員がいない
造形あそびをしている	77人(42%)ア	118人(68%)イ
造形あそびをしていない	61人(39%)ウ	97人(61%)エ

表-7 教科書の工夫と造形あそび

	造形あそびをしている	造形あそびをしていない
工夫	101人(63%)	57人(37%)
教科書どおり	102人(50%)	100人(50%)

表-8 指導の自信と造形あそび

	造形あそびをしている	造形あそびをしていない
指導に自信がある	51人(63%)ア	27人(37%)イ
指導に自信がない	142人(50%)ウ	122人(50%)エ

表-8 指導の自信と造形あそび

	指導に自信がある	指導に自信がない
造形あそびをしている193	51人(26%)オ	142人(73%)カ
造形あそびをしていない147	27人(18%)キ	122人(82%)ク

表-9 担当学年、年代と造形あそび

	造形あそびをしている208人	造形あそびをしていない162人
低学年担当	85人(70%)	36人(30%)
中学年担当	54人(55%)	45人(45%)
高学年担当	36人(36%)	64人(64%)
担当外	33人(70%)	14人(30%)

表-9 担当学年、年代と造形あそび

	造形あそびをしている208人	造形あそびをしていない162人
20代	26人(53%)	23人(47%)
30代	31人(51%)	30人(49%)
40代	52人(49%)	54人(51%)



中30件)イ.活動に意義を見いだせない,評価の仕方が分からないなど指導及び評価に関する理解不足及び指導力の不足を感じさせるもの.(17件)ウ.その他.(9件)その他の中には「年間指導計画に入っていないため」「低学年中心に重点を置いているため本校での高学年には入っていない」「高学年のため」など,学習指導要領に対する理解不足も見られる.また,造形あそびに取り組む理由を見てみると,「教科書に掲載されているから」「年間指導計画に位置づけられているから」などの消極的な理由もあるが,「子どもが楽しそうに取り組むから」など,実際の造形あそびを通して教員が学習の魅力を実感している理由が多い.

#### 造形あそびへの理解についての考察

造形あそびに取り組んでいない理由から推察できることは,造形あそびに対する理解が低い点が浮かび上がってくる.例えば,物理的条件を取り組まない理由としてあげている中で,「大がかりな題材が多い」など,造形あそびに対し,ダイナミックな活動が造形あそびであるというような,イメージの偏りが見られる.机の上でできる造形あそびとか,または従来行っている題材の中にも造形あそび的なねらいを持った題材はある.そのような,造形あそびの意義や目的の理解不足から造形あそびの特徴を生かした授業がされていないことが考えられる.このことは,表7のデータからも推察できる.これは本来教科書通りに進めれば必ず造形あそびが複数頁掲載されている<sup>6)</sup>.つまり,教科書の造形あそびの題材を造形あそびとして意識していないか,または「つくりたいものをつくる」との学習目標の違いを区別できていないことが予想できる.

指導要領で示された造形あそびのねらいは「一人一人の創造的な想像力や造形感覚,技能などの資質や能力を十分に働かせ,伸ばすよ

うにすることをねらいとしている。」に対し,つくりたいものをつくる活動は「造形感覚や創造的な技能などを働かせ,よさや美しさなどを考えながら,表し方を工夫するなど創造的に表現する力を育てることをねらいとする」となっている.つまり,活動そのもののねらいが異なっており,そのねらいの把握なしでは充実した学びは保障できない.また,指導についての自信と造形あそびの関連では表8-  
-クのを見てみると,造形あそびをしていない教師の82%が指導に自信がないと答えており,表1の Bの66.3%を大幅に上回っている.同様に造形遊びをしている教員も指導に自信が無いと答えている割合が73%と高い.ここで注目すべきは後者の造形あそびをしている教員の中で,自信がないと答える率の高さ(表8-  
-カ)である.このことは,小学校では教科書を中心に授業が展開されている実態から考えると,教科書に掲載されているので指導はしているが,指導については自信がないという教員の実態が見えてくる.アンケートで「造形あそびで何を育てるのかよくわからない」という記述が多いことから造形あそびのねらいの理解が低いのではないだろうか.

学年による実施状況からは低学年では比較的行われる造形あそびが学年が上がるに従い実施されなくなる傾向が強い.高学年になると時数が年間50時間に減少することも大きく影響していると考えられる.中には,「年間指導計画に位置づけられていない」とか「高学年だから」など,学習指導要領と離れた指導計画の存在や,または,教員自身が年間指導計画に位置づけられている造形あそびに気づいていない実態がある.いずれにせよ,学習指導要領が十分に理解され,造形あそびのねらいを十分に把握した授業実践がまだまだ不足している実態がある.

(三澤一実)

#### v. 保護者の期待

小学校に子どもを通わせる保護者3,000人を対象にアンケートを実施し、1,741人の回答を得た。その集計結果から図画工作科に対する保護者の期待を述べる。

「図画工作の授業が必要か不要か」について、必要（あった方がよい）と答えた解答は98.1%と圧倒的に多い。理由として「ものを作り出す喜びを学べる」（84%）「発想力や創造力を鍛え、創造的な力を身につけられる。」（75.7%）「子どもの頃はたくさんの教科を学びその中で自分の特性を探した方がよい」（58.5%）とある。「やりたい人だけが取り組む選択制でよい」と回答した人は1.4%のみである。このことからほとんどの保護者が図画工作を必修教科として要望している。これはアンケートに協力していただいた保護者が図画工作について興味や関心を持っていることと図画工作に関してその学びの必要性を理解している結果といえよう。

反対に「図画工作は不必要（なくてもよい）」と答えた人はわずか1%であった。その理由として「すべての人が絵や彫刻など表現活動が好きではない。」「選択制にしてやりたい人だけ取り組めばいい」をあげているが、むしろ「最近の図画工作はなんだかわけのわからないものをつくらせている。」の意見に注目したい。時代とともに変遷していく図画工作の表現活動をどのように説明していくか指導者側の課題といえるだろう。そのためには教員が児童の発達段階に応じた授業内容と学習のねらいを明確にした上で、図画工作の役割について保護者に伝えていく機会が必要となる。たとえば、保護者会等では作品展示の他に制作過程での学びの様子を説明できる写真や映像資料の提供、また、題材の解説、授業公開では保護者参加型の授業で体験から学ぶ機会の提供などの工夫したい。日頃から授業の様子を児童を通して保護者に伝達し、保護者の期待に応えていく必要がある。

「小学校6年間で、図画工作の授業で必ず教えてほしいことはどのようなことですか」について、「表現する楽しさを味わわせてほしい」（71.2%）。「創意工夫する能力を養ってほしい」（63.7%）。「基本的な用具や道具の使い方をおしえてほしい」（60.1%）。「絵の描き方や工作の作り方などの技術を教えてほしい。」（58.8%）の回答が上位をしめた。この数字から表現活動をより楽しく学ぶために基本的な用具の使い方や、絵の描き方など技能が必要であるという考えであると同時に、親の世代が受けてきた教育の価値観を垣間見ることができる。

また、教えてほしいことを選択肢には鑑賞や文化理解、また伝達手段としてのデザインの項目もあったが、結果は20%前後で少数であった。小学校6年間ではまだこれらの項目は関心が低い。中学校、高校の美術に期待するのであろう。このアンケート項目で着目したいのは「集中力や根気」（38.0%）「試行錯誤してももの作り出す経験」（28.8%）である。どの教科でも子どもの能力を高めるための重要な項目である。また「美しいものに感動する心を育ててほしい」（47.2%）「個性の大切さに気づかせてほしい」（33.2%）は上位4項目とともに、図画工作の特性として「自己存在感」や「豊かな心」の育成について保護者等が子どもの成長に「豊かな人間性」を求める願いととれる。このことを考えると、義務教育9カ年を見通して図工・美術教育では児童生徒の発達段階をふまえたカリキュラムを組み立て、心の教育の一端としても保護者の期待に添える授業展開をしなくては必要がある。

（宮島瑞子）

#### ・学びの質を高めるために

児童の学びの質を高めるには教師の指導力向上無くしてはあり得ない。現在審議されている中央教育審議会でも指摘<sup>7)</sup>されている。

所沢市における小学校教員の図画工作科指導意識

表-10 小学校で教える図画工作の授業についてあなたのお考えをお聞かせください。

	%	人数
問 図画工作の授業は必要か不要ですか。(どちらかに を付けてください)		
必要(あった方がよい)	98.10%	1708
いらぬ(なくてもよい)	1.00%	18
無回答	0.90%	15
問 -1. 必要と答えた方にお聞きします。その理由は以下うちどれですか。当てはまるものすべて を付けてください。		
絵の描き方や工芸の作り方が学べるので、社会に出てから趣味や職業で活かすことができる。	30.20%	516
色彩やデザインの勉強をすることで日々の生活を豊かに演出する力が付く。	31.70%	541
ファッションや美的なセンスを鍛えることができる。	11.50%	196
芸術作品に興味を持たせ、鑑賞する楽しさを学ばせてくれる。	33.00%	563
ものを作り出す喜びを学べる。	84.00%	1434
発想力や想像力を鍛え、創造的な力を身につけられる。	75.70%	1293
日本の文化や世界の文化の理解が進む。	14.80%	253
美的な感性が育ち、心が豊かになる。	39.30%	671
図画工作を通して自分なりの考え方を発見し生き方を考えることができる。	21.30%	363
図画工作を通して自分を取り巻く身の回りの世界を把握する力が付く。	12.60%	216
子どもの頃はたくさんの教科を学びその中で自分の特性を探した方がよい。	58.50%	1000
手先や脳の発達のために必要である。	43.60%	744
思い思いの作品づくりを通して個性が育つ	52.10%	889
図画工作はあった方がよいと思うが、具体的理由は見あたらない。	3.20%	54
やりたい人だけが取り組む選択制でよい。	1.40%	24
問 -2. いらぬと答えた方にお聞きします。その理由は以下のうちどれですか。当てはまるものすべて をしてください		
図画工作よりも、他の教科に時間をさくべきだ。	33.30%	6
感性やセンスは図画工作に取り組まなくても身に付く。	22.20%	4
すべての人が絵や彫刻など表現活動が好きではない。	61.10%	11
図画工作を学んでも、絵や彫刻が上手になるとはいえない。	33.30%	6
図画工作の必要性を感じない。	27.80%	5
図画工作を学んでも将来役に立たない。	11.10%	2
趣味的な教科は学校で行わなくてもよい。	11.10%	2
最近の図画工作は、なんだかわけのわからないものを作らせている。	38.90%	7
はっきりとした理由は考えられないが特に図画工作は必要だと思う。	16.70%	3
選択制にしてやりたい人だけ取り組めばいい。	66.70%	12
問 小学校6年間で、図画工作の授業で必ず教えてほしいことはどのようなことですか。必要と思われるものを以下の25項目の中から10個選び をつけてください。( の数は10個まで。少なくともよい。)		
絵の描き方や工作の作り方などの技術を教えてほしい。	53.80%	937
色や形についての知識を教えてほしい。	38.40%	669
基本的な用具や道具の使い方を教えてほしい。	60.10%	1047
伝統的な工芸などを重視して、日本文化について教えてほしい。	19.60%	341
作品鑑賞で自国や他国の文化理解を進めてほしい。	25.80%	450
有名な絵や作者についての知識を教えてほしい。	17.70%	308
美術館の利用の仕方や楽しみ方を教えてほしい。	20.60%	359
絵の見方を教えてほしい。	13.00%	227
基本的な日本及び西洋の美術史を教えてほしい。	5.70%	99
風景などを観察して描く授業を重視してほしい。	29.70%	517
展覧会に入選する作品の作り方やテクニックを教えてほしい。	2.90%	50
写真や、ビデオ、アニメーションなどの学習をしてほしい。	7.60%	132
コンピュータグラフィックスなど現代的な学習に取り組んでほしい。	20.10%	350
デザイン感覚やセンスをのばしてほしい。	17.20%	299
様々な材料を使ったりしながら自由にあそびてほしい。	39.30%	684
創意工夫する能力を養ってほしい。	63.70%	1109
表現する楽しさを味わわせてほしい。	71.20%	1239
美しいものに感動する心を育ててほしい。	47.20%	822
個性の大切さに気づかせてほしい。	33.20%	578
集中力や根気を育ててほしい。	38.00%	662
将来の生活やつながるような指導をしてほしい。	3.90%	68
手先を器用にさせてほしい。	4.80%	84
試行錯誤してものを作り出す経験を味わわせてほしい。	28.80%	502
思いのままに表すことで、心の解放をさせてほしい。	17.20%	299
ものを作り出す活動を好きになるようにさせてほしい。	27.60%	481

そこで、今回のアンケートを元に図画工作における学びの質を高める方策を、教員の資質向上に視点をあててまとめていきたい。また、図画工作・美術の学力保障カリキュラムを生かしていく上でも実践的な提案となるようにしたい。提案は共同研究者と共に議論し見出した具体的な改善策を中心にまとめる。

## 1. 研修のあり方

### i. 小中連携の教員研修

教員が指導や評価に自信を取り戻すためには研修を行うことが一番の解決策である。今回のアンケートからは、日々の授業実践の不安を取り除くためには相談できる教員、専門的な知識や技法も必要に応じて教えてくれる教員の存在を望んでいる。そこで、中学校の美術科教員との連携に改善の方策を見たい。中学校には専門的な知識や技法を身につけた教員がいる。小学校では、図画工作科を得意とする経験豊富な教員もいる。たとえば、放課後に中学校教員を招いて専門性を生かした実技研修会や作品の評価研究を行うなど、小中学校の教員合同研修で「定期的な情報交換」「ニーズに応じた実技研修」等を各中学校区や地区ブロック単位で実施し解決の糸口としたい。この方策は小中の課題を子どもの発達から捉えなおす相互理解の機会にもなると同時に、中学校の教員が各校1名という環境の中でお互いに情報交換をする良い機会となる。また、造形あそびについては、中学校の教員の中には否定的な意見を持つ教員もあり、それは実際の活動の姿を知らない場合が多い。この小中教員の相互交流をつくるのが所沢市全体の図画工作・美術の学力を向上させていく大きな力になる。そのためには、研修時間の確保を教育委員会レベルで保障していく必要がある。同時に校内研修で中学校教員を派遣してもらうような小中の協力関係を早急につくる必要がある。

### ii. 研修内容

つぎに研修の内容である。研修は教員自身が参加するワークショップ形式の研修や、ビデオで撮影した子どもの活動する姿を分析する評価研究など、具体的な研修が必要である。様々な事例を研究して初めて一人一人にあった指導ができるようになる。アンケートで「造形あそびは自由な発想の機会。子どもはとも生き生きと自由な発想で活動するため」という教員の記述があった。そのように子どもの姿を教員がしっかり捉え、子ども自身の活動に造形美術教育の意義を見いだすことができれば図画工作科の指導や評価についての理解も深まるだろう。造形あそびの研修については、現状では小学校図工主任を対象とした研修会止まりで、教員一人一人まで波及していない。造形あそびでは物理的条件を理由に取り組んでいない教員が多い中、大がかりな活動を必要としない題材開発が求められる。その際、十分に造形あそびのねらいが達成できる題材を考えなくてはならない。また、できることなら小中の教員連携の中で題材を開発をしたい。その際、活動のスタイルの追求ではなく活動自体に子どもの学びを見いだせる題材の開発及び指導のあり方の研究が求められる。

### iii. 日常の研修

子どもの作品を見合うことが先ず必要である。休み時間など、子どもの作品をどう評価するか、具体的なものを提示して議論することが重要である。つまり、評価のあり方が指導を考えることとなり、題材を児童の実態に合わせて工夫していくことにも繋がっていく。アンケートで図画工作は学級担任がよいと答えた理由に児童理解が進むと多くの教員が答えているように、図画工作の作品を通して児童理解を深める良い研修にもなる。このようなコミュニケーションの機会に溢れた職場環境の創出は教員一人一人の意識とともに管理

職に求められるマネジメント能力にもなるだろう。

## 2. 所沢学力保障カリキュラムに向けて

今回の調査で明らかになったことは、図画工作科を教える教員の指導や評価等のスキルアップを図る研修環境が少ないということである。同時にこのことは各教員の図画工作を教える意欲や意識の問題として、学力向上カリキュラムと並列する課題と言えよう。

アンケートを分析し議論をしていく中で常につきまとう問題は教員の勤務時間の問題であった。この時間の問題は「時間を見いだす」ことでしか現状では解決できない。要するに優先順位の問題でもある。実際に多忙の中で校務もこなす教員の意識も、自ら進んで指導に自信がない図画工作のために時間を生み出していこうという積極的な意志や行動には繋がらないだろう。しかしながら、保護者の図画工作への期待の大きさを考えると、このまま放置しておくわけにはいかない。このような実態を真摯に捉え、行政からの教員の資質向上に関わるシステム作りとともに、指導内容と指導目的を明確に示す義務教育9カ年を見通した学力保障カリキュラムの作成を急がなければならない。

(三澤一実)

### 注

- 1) 平成17年度・18年度自主研究員 鈴木勢津子, 所沢市立和田小学校(17年度)安松小学校(18年度)教諭, 増田毅, 所沢市立東所沢小学校教諭, 廣江香代子, 所沢市立清進小学校教諭(17年度), 猪俣修, 所沢市立三ヶ島中学校教諭, 宮島瑞子, 所沢市立向陽中学校教諭, 麻生敬子, 所沢市立狭山ヶ丘中学校教諭(18年度)田中俊一, 所沢市立柳瀬中学校教諭。
- 2) 「新しい教科書活用の視点 図画工作・美術科における教科書の役割」文教大学付属教育研究所「教育研究所紀要」第11号, 三澤一実, 2002
- 3) 小学校学習指導要領解説図画工作編 文部省
- 4) その一つの理由は戦後まもなく教員の有志が始

めた「所沢市子ども写生大会」の存在が大きい。この写生大会は小中学校の教員が実行委員として、子どもの絵の審査や、審査のための研修会などを積み重ね、半世紀以上も各学校の図画工作教育の牽引者となってきた実績がある。

- 5) 尾木によると「現場こそ「大学院」(日常的な研修)質の高い職員室文化の建設。相互信頼に基づく伸びやかな学び合い, 支え合い。開く実践スタイル」とし, 教師集団で学び合う環境及びそこで生まれる学び合いの文化を職員室文化と言っている。「あるべき教師像と教員の質の向上について」-「子どもの目線」で考える-, 中央教育審議会義務教育特別部会(第3回議事録・配付資料[資料4], 2005年3月23日, 尾木直樹(法政大学キャリアデザイン学部教授・早稲田大学大学院客員教授)
- 6) すがこうさく(開堂出版, 平成16年度)では造形あそびを扱った題材が低学年9題材(10頁) 中学年6題材(9ページ) 高学年6題材(6頁)掲載されている。
- 7) 「教師の質の向上のためには, 職場の同僚同士のチームワークを重視し, 全員のレベルを向上させる視点と, 個々の教師の能力を評価し, 向上を図っていく視点の両方を適切に組み合わせることが重要である。その際には, 校長のリーダーシップ及び学校を支える教育委員会の役割が重要である。」中央審議会, 「新しい時代の義務教育を創造する」(答申)第 部第2章(2)ア3項, 平成17年10月26日